

アンソニー・ギデنزの 「再帰性」概念について

萩原 優騎 *

はじめに

「再帰性」という概念は現在、様々な領域において用いられている。その中でも大きな影響力を持っていると思われるのは、アンソニー・ギデنز (Giddens, Anthony) が社会学の観点から提示した定義であり、「グローバル化」と呼ばれる今日の状況を分析するために有効な概念であるとされている。本稿では、この概念について、社会学のみならず他の領域とも関連させながら、学際的に検討することを目的とする。これは、国際基督教大学 21 世紀 COE プログラム『『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開』の「安全な生活環境と STS (科学技術と社会)」グループに設置した「再帰性とアイデンティティ」を主題とする研究会で昨年度まで取り組んできた研究を基礎としつつ、その内容を更に展開させようとする試みである。今年度からは、日本学術振興会特別研究員としての研究課題「主体と社会の再帰化が進行する時代の新しい意思決定論の構築のための精神分析的研究」に着手する。その出発点において、研究上の主要な概念である「再帰性」について、批判的に問い直すことが不可欠であると考ええる。

本稿では、以下の手順で考察を進める。最初に、ギデنزが「再帰性」という概念をどのような文脈で使用し、どのように定義したのかということについて記す。紙数の都合や論点の集約の必要性から、ギデنزの膨大な著作の中でも、この概念について主題的に論じている一冊である *The Consequences of Modernity* (邦題『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結——』) における議論に限定して、本稿では論じることにしたい。次に、ギデنزの定義に対して批判的に考察している諸論考に触れ、それらとの関連で検討する。前半では主として社会の再帰性を、後半では主体の再帰性を扱う。最後に、それまでの作業を通じて明らかになった点を振り返り、「再

* 日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学大学院新領域創成科学研究科)、
本学教養学部非常勤講師

帰性」という概念の更なる可能性を示唆することとしたい。

I. モダニティと再帰性

1. モダニティの徹底化

ギデンズが *The Consequences of Modernity* にて「再帰性」を論じるに当たり、それと不可分なものとして位置づけている概念が「モダニティ」である。ギデンズが冒頭で示している定義によると、モダニティとは、17世紀以降のヨーロッパに出現し、その後に世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式であるとされる。⁽¹⁾ この定義において念頭に置かれているのは、「ポストモダニティ」という概念との対比である。もちろん、ポストモダニティについても様々な定義があるが、その代表的なものはリオタール (Lyotard, Jean-François) によるものであり、ギデンズもそれを参照している。リオタールの認識の中心にあるのは、モダンというメタ物語への懐疑である。すなわち、メタ物語という正当化の機能を担う語りが衰退し、無数の物語が日常生活の織物を織り続けていくという状況が、ポストモダニティとして定義されている。⁽²⁾ このような状況では、知の特権性が失われるとされ、その相対性が論じられる傾向にある。その結果、社会組織について体系的認識を得られないという方向感覚の喪失や、世界の統制が不可能であるという認識の蔓延が、現代社会の特徴になっているという。⁽³⁾

しかし、こうした状況をポストモダニティとして位置づけることは不十分であると、ギデンズは考える。むしろ、モダニティのもたらした帰結がこれまで以上に徹底化し、普遍化していくという時代に突入しようとしているという。⁽⁴⁾ 徹底化が進むモダニティの特徴の一つとしては、「時間と空間の分離」が挙げられる。時計が発明される以前の社会においては、日々の生活の基盤となる時間の測定は場所に結びつけられ、自然界の周期的出来事によって時間の特定がなされていた。⁽⁵⁾ 近代化の中で時間の均質化が進むと、それは空間概念の変容をももたらす。近代以前の社会では、ほとんどの人々にとって社会生活の空間的特性は、目の前にあるもの、特定の場所に限定された活動によって支配されていたという。⁽⁶⁾ モダニティにおいては、このような状況からの変化が生じる。村上陽一郎は、同様の問題を技術の性質という観点から考察している。近代以前の社会では、技術の性質が可視的であり、技術の必要性自体も生活空間によって規定されていたという指摘である。⁽⁷⁾

時間と空間が近代的な性質へと変容する場面では、「脱埋め込み」が生じる。すな

わち、時間と空間が標準化されると、社会活動は目の前の特定の脈絡への埋め込みから解放されることになる。⁽⁸⁾「脱埋め込み」を、ギデンズは次のように定義する。それは、社会関係を相互行為のローカルな脈絡から切り離し、時空間の無限の拡がりの中に再構築することである。⁽⁹⁾ただし、そこでは様々な専門家システムへの人々の信頼が前提とされていると、ギデンズは述べる。ここで言う「信頼」は、人々が専門家システムに精通しているために成り立っているものというよりは、それが通常想定されている通りに作動するという経験に基づく一種の「信仰」である。⁽¹⁰⁾ 専門家システムへの信頼は、「リスク」という概念と不可分なものとして位置づけられる。何を許容可能なリスクと見なすかということは、専門家システムへの信頼を維持する上で重要であり、「安心」という経験は信頼と許容可能なリスクとの間のバランスによって支えられているという。⁽¹¹⁾

次にギデンズは、脱埋め込みを遂げた近代社会の状況と、それ以前の社会における伝統との対比を試みる。伝統的文化では、過去は尊敬の対象とされるのであり、伝統とは行為の再帰的モニタリングを共同体の時空間と結び付けていく様式である。⁽¹²⁾ ただし、近代以前の社会における伝統の再帰性は、近代以降のそれとは異なる。前近代では、再帰性は伝統の再解釈と明確化にほぼ限定されていて、過去により多くの比重が置かれていた。⁽¹³⁾ 近代の到来により、この状況は変化する。伝承されてきたものであるという理由だけでは伝統を正当化することはできず、伝統それ自体によってはその信憑性を検証できない知識に照らしてのみ、正当化が可能となる。⁽¹⁴⁾ ただし、それは伝統の終焉を意味するわけではないという。そこでの伝統は、その存在証明を近代の再帰性からのみ得ているということである。⁽¹⁵⁾ この点について宮永國子は、次のように定義する。「再帰的近代化」とは、近代の持つ破壊力と再生力の一つのものとして扱う概念である。⁽¹⁶⁾

再帰的近代化を遂げていく過程で、各々の伝統は近代文明の影響下へと位置づけられていく。近代的制度が世界中に拡大していく反面、西欧の有した世界規模の覇権が徐々に衰退しているとしても、それはモダニティの徹底化に起因するものであると、ギデンズは論じる。⁽¹⁷⁾ 村上は、これを「文明のパラドックス」と呼ぶ。均され普遍化された文明の内部において、西欧近代文明の作り出すものを受容した諸文化の平均化が進むために、文明自身が「文化」であることを止め、自身の衰退の原因を作り出すということである。⁽¹⁸⁾ しかし、そこで生じていることは諸文化の消失ではないと、村上は付け加える。むしろ、諸文化のアイデンティティは、文明の持つ力学的作用によっ

て初めて確立されることが多いのであり、個々の文化の独自性の自覚に基づく個別性尊重の要求は、文明とその被支配を要求される文化との相互作用の中で育っていく。⁽¹⁹⁾ 宮永の表現を用いれば、統合という作用が反統合という反作用を生む。⁽²⁰⁾

2. 専門家知識との関係

以上に述べたような状況は、「グローバル化」の一側面である。グローバル化とは、遠く隔たった地域を相互に結び付けていく世界規模の社会関係が強まっていくことであり、ギデンズは定義する。⁽²¹⁾そこにあるのは、先述した統合と反統合の関係である。すなわち、ローカルな変容はグローバル化の過程の一部を構成しているものであり、全体として同一方向への変化を辿るとは限らず、むしろ相互の対立が生じている。⁽²²⁾この過程においては、ローカルなものの「脱埋め込み」だけでなく「再埋め込み」もなされる。それは、脱埋め込みを達成した社会関係が、再度充当利用されたり作り直されたりすることである。⁽²³⁾ただし、再埋め込みを遂げた伝統は、脱埋め込み以前のものとは異なる。近代化を遂げた伝統においては、先述した専門家システムが生活空間を形成するものとなる。そこでは、単に専門家知識がリスク計算の方法となるというだけではなく、専門家知識自体が絶えずもたらす再帰性の結果として出来事の世界を現実に創り出していく、あるいは再生産していくという状況下でのリスク計算が問題となる。⁽²⁴⁾

ただし、専門家システムへの人々の信頼は、それ自体のみによって維持されているのではない。ギデンズは、専門家システムへの信頼を「顔の見えないコミットメント」と呼び、「顔の見えるコミットメント」に対置する。後者は、共にそこに居合わせている状況下で確立される社会的結びつきによって維持されるもの、あるいはそうした結びつきの中に表出される信頼関係である。⁽²⁵⁾これは、一旦は脱埋め込みを遂げた伝統の再埋め込みによって実現するのであり、その影響は「顔の見えないコミットメント」にも及ぶ。その意味で、再埋め込みとは、顔の表情が「顔の見えないコミットメント」を維持したり変容させたりする手段となる過程である。⁽²⁶⁾そして、再埋め込みされた伝統において、人々は当該の秩序に合致する存在として形成されていく。したがって、専門家知識に対する信頼には社会化が重要であり、例えば学校の理科教育で児童に伝達されるのは、単に科学技術的な知見の内容だけでなく、そうした知識に対する敬意も含む。⁽²⁷⁾それを実現したものの一つは、近代的な公教育という制度における教育の均質化であった。村上は、それを「生活機能の外化」と呼ぶ。すなわち、従

来は自前であった生活機能を公共のそれに委託してしまうのが、近代の都市生活である。⁽²⁸⁾

専門家知識が対象とするのは、科学技術だけではない。ギデンズも指摘するように、あらゆる人間関係もその対象として扱われている。その一例が、「心理学化」と呼ばれている、心理学的言説の影響力の増大である。それは専門家知識の次元だけでなく、通俗化された形で心理学や精神分析に関する知識や概念が一般の人々に普及していること、占いや心理テストが次々に流行し消費されることなど、今日の社会現象にもなっている。先述のように、ポストモダン「大きな物語」の不在という状況で無数の物語のネットワークから日常が形成されていることを論じた。それに対してギデンズは、それがモダンの徹底化であることを指摘した。このような観点から心理学化を評価した場合、やはり「大きな物語」が無数の物語に置き換えられるということ以上のものを意味していると考えられる。心理学的言説は、強力な再帰化の道具として種々の物語を解体してきた一方で、「トラウマ」や「アダルトチルドレン」といった言葉の流行による神話化を通じて、主体の再帰化の進行が徹底化することを停止する道具にもなっている。⁽²⁹⁾

こうして「大きな物語」が揺らぐと同時に各々の物語が再形成されていくことは、社会の再帰化の一側面である。これまで秩序の安定性を維持する機能を果たしてきた、ローカリティという共通基盤を人々が想定することは、一層困難になっている。ただしギデンズは、ハーバーマス (Habermas, Jürgen) が掲げるような視点からは、この状況を説明できないと述べる。つまり、今日の状況は、抽象的システムが既存の生活世界を植民地化し、人々の意思決定を専門家知識に従属させることを意味するわけではないという。⁽³⁰⁾ その理由として、次の二点が挙げられている。⁽³¹⁾ 第一に、近代的な制度が成立した状況の根底に、以前と変わらない生活世界を想定することはできないということである。第二に、人々は抽象的システムとの関わりにおいて、多少ともその基本的原理に精通していなければならないという点で、専門家知識を継続的に再占有しているという。

3. ロバートソンの批判

以上のようにして再帰的近代化が進み、その状況が世界規模へと拡大していく。ギデンズによると、モダニティがもたらした諸々の帰結の中で、グローバル化は重要な位置を占めるものである。グローバル化は、西欧の諸制度を世界中に浸透させてきた

だけでなく、その過程で他の文化を押しつぶしていったのであり、一体化と同時に分裂していく均一でない発達過程であるという。⁽³²⁾ 一方、グローバル化は近代に特有な現象であるのかという点について、ロバートソン (Robertson, Roland) は異議を唱える。グローバル化とは、近代化に先行して多くの世紀にわたる長いプロセスであり、ギデンズがそれを近代性の直接の産物とすることは受け入れがたいという。⁽³³⁾ モダニティが全面的に開花する以前からグローバル化が進行していたことの例として挙げられているのは、大航海時代や諸宗教の伝播などである。そして、グローバル化がモダニティの帰結であるとしたら、近代はどのようにして先行するグローバル化を終結させたのかという疑問を投げかける。⁽³⁴⁾

この批判について、宮永は「グローバル化」という概念の定義の問題として捉えている。ロバートソンは、この概念を世界統合のベクトルを表すために用いているのであり、そのように定義するならば、グローバル化は近代に限定されないことになるだろう。⁽³⁵⁾ しかし、宮永も指摘するように、これは定義と問題関心の違いに由来する見解の不一致であるように思える。ギデンズの場合は、現代社会の特性の解明に関心が集中しているのであり、そのように理解するならば両者の定義は相互補完的であり得る。⁽³⁶⁾ そこで、ロバートソンの観点によって提示されたものの中でも、再帰的近代化論との関連で検討することで積極的な意味を持つと思われる点を見てみることにしたい。ロバートソンの定義では、グローバル化とは、放置しておく让世界が同質化し個別性を抹消してしまう過程ではなく、むしろ個別主義を推進するという見方、グローバルな多様性を推進するという見方である。⁽³⁷⁾ この視点は、既に引用した宮永と村上の視点に重なるものとして理解できる。すなわち、諸社会がますます狭く圧搾される時に、個別の社会と地域の独自性を確立する必要性を感じるようになるということである。⁽³⁸⁾

ギデンズはグローバル化について正確に把握できていないと、ロバートソンは批判する。世界の諸社会の全てが、西欧に由来する高度な近代の再帰性に圧倒されているかのように、ギデンズは捉えているのではないかという。⁽³⁹⁾ それに対してロバートソンは、非西欧諸国のグローバル化の過程には、それとは異なる様相を確認できると考える。それは、「個別主義の普遍主義化」、「普遍主義の個別主義化」として定義されている。前者は、個別性、独自性、差異、他者性には事実上制限がないという観念の広範な拡大であり、後者は、普遍性がグローバルな人間という具体性を与えられているという観念を指す。⁽⁴⁰⁾ つまり、普遍主義と個別主義は単に衝突しているのではない。

グローバル化とは、これらの二重のプロセスを制度化するものである。⁽⁴¹⁾ただし、この定義とギデンズの見解は相容れないわけではない。先程引用した箇所からも明らかのように、グローバル化には一体化だけでなく分裂という契機もあると、ギデンズは述べている。各々のローカリティは、グローバル化の過程とは無関係ではられないという点に、ギデンズの強調点はある。すなわち、グローバル化は、ローカルの局とグローバルの局の両端で、人々を大規模なシステムに結び付けていくと論じている。⁽⁴²⁾ロバートソンの定義は、その点をより掘り下げたものであると言えるだろう。

ロバートソンのギデンズへの批判としてもう一点重要なのは、「他者」という概念の位置づけについてである。ギデンズによると、グローバル化された状況での世界的規模の相互依存関係においては、もはや「他者」は存在しないという。⁽⁴³⁾ロバートソンは、ギデンズのこの記述を引用し、その前提を問う。グローバル化された状況においてこそ、「他者」の問題は生じるのであるということ、ギデンズは理解していないという。⁽⁴⁴⁾それは、「個別主義の普遍主義化」と「普遍主義の個別主義化」という事態を指している。すなわち、単一性によって特徴付けられるものとしての世界像と、「他者」の場としての世界像は両立するということである。⁽⁴⁵⁾この批判も、ギデンズとロバートソンの力点の違いに由来するものだろう。ギデンズが強調するのは、グローバル化とは、「一つの世界」に生きることに於ける、主体と社会組織との同時変容の過程にほかならないということである。⁽⁴⁶⁾そこで、認識主体の再帰性に焦点を当てて、その主体とはどのようなものであるのかということについて、ギデンズの記述を精神分析との関連で次に検討する。

II. ラカン派精神分析の観点から

1. 存在論的安心と信頼

ギデンズは、近代以前であれ近代以降であれ、主体の安定性の成立には「存在論的安心」が不可欠であると論じる。それは、自己のアイデンティティの連続性に対して、また、行為を取り囲む社会的、物質的環境の安定性に対して人々が抱く確信である。⁽⁴⁷⁾このような機能は、人間が生育する過程で幼少期に与えられるものであるという。存在論的不安から守ってくれる感情面での予防接種、信頼という投薬は、幼児の介護を行う母親によって大抵はなされると、ギデンズは述べる。⁽⁴⁸⁾ここでギデンズが参照しているのは、「自我同一性」に関するエリクソン (Erikson, Erik H.) の考察である。エリクソンは、身体の支配と文化的な意味の一致という体験を通じて、自我が社会的現

実の枠組みにおいて定義されたものへと発達しつつあるという確信を、自我同一性と呼ぶ。⁽⁴⁹⁾ 自我同一性は、自他に対する信頼を通じて形成されていくとされる。そこにあるのは、時間的な自己同一と連続性についての知覚と、他者がそうした自己同一と連続性を認知していることの知覚の、同時的な認識である。⁽⁵⁰⁾

このことからギデンズは、経験の相互性が信頼にとって重要なものであると論じる。そして、そのような論点はエリクソン以外にも見られるものであるとして、ウィニコット (Winnicott, D. W.) に言及する。ウィニコットにおいて、この問題を論じるための中心的な概念は、「移行対象」である。それは、自立の過程で親の代理物として依存する対象であり、この対象との関係を通じて自立へ向けた心身の組織化が進行する。⁽⁵¹⁾ ギデンズは、ウィニコットの定義に依拠しつつ、この概念の意義について論じる。すなわち、幼児と介護者の隔たりにおいては、親に対する幼児の信頼が機能しているであり、介護者が不在の状態に耐えることのできる能力を幼児は獲得していく。⁽⁵²⁾ その過程で重要な意味を持つのは、「不在」という事態である。不在の介護者が戻ってきてくれるという信頼、信頼の対象である介護者が独立した経験をしているという感覚によって、時間的、空間的隔たりが括弧に入れられて無視され、不安は遮断される。⁽⁵³⁾ ウィニコットは、この点を自立の契機として位置づける。つまり、欲求不満の体験、欲求に対する親の適応が不完全であることが、この自立を可能にするということである。⁽⁵⁴⁾

ギデンズは、ウィニコットの観点に見られるような対象関係学派の考え方は、ラカン派の精神分析よりも、ここでの議論には適切なものであると述べる。ラカン (Lacan, Jacques) の研究は、自己の脆さや崩壊を把握するのに有用であるために重要であるが、現実には融合や統合を目指す逆方向の働きによって補われている過程に、主として焦点を当てているという。⁽⁵⁵⁾ ギデンズは、ラカンに関してはこれ以上のことを述べていないが、対象関係論の有用性については次のように論じる。対象関係論は、自身の人格の一貫性をどのように獲得し、その獲得がどのように外部世界の実在性の再確認と関係していくのかということ进行分析する上で、示唆に富んでいるという。⁽⁵⁶⁾ このようなギデンズの評価には、検討の余地があるだろう。第一に、ラカンの視点は主体の脆さや崩壊を把握するために有用であるというのは、主体の不完全性を指しているのか、精神病について述べているのか不明である。しかも、そのどちらであったとしても、そこで主題的に扱われているのは主体の崩壊ではない。後述する事柄とも関連するが、日常の自明性が揺らぐ状況においても、なお症候として自身を維持しているというの

が、ラカンが示す主体の構造である。

第二に、対象関係論の評価についても、ギデンズの見解には賛成できない。ギデンズは、主体の人格の一貫性が獲得されることを前提に、ラカンの視点との比較を行っている。しかし、ラカン派精神分析が示すのは、そのような一貫性は存在しないということにほかならない。主体が自他の恒常性を想定できるのは、自我が安定したものとして機能しているからである。主体の自我は、「鏡像段階」を経て形成されていく。それは、自身と類似した他者の身体を媒介として、自己という存在についての意識が分離されていく段階であると定義されている。⁽⁵⁷⁾ 主体の自我像は「想像的なもの」あるいは「想像界」の機能に関わるものであり、それが形成されていく過程では、言語を中心とする「象徴的なもの」あるいは「象徴界」が関与している。ラカンによると、「象徴的なもの」の仲介によって主体は社会的に定義されるのであり、象徴の交換を通じて互いの自我を位置づけることで、「想像的なもの」の統御がなされる。⁽⁵⁸⁾ しかし、それは自我の一貫性の獲得には等しくない。それどころか、他者のイメージに自身を疎外する行為であるという点で、通常の意味での「アイデンティティの獲得」とされるものとは正反対である。⁽⁵⁹⁾

2. ルーティーンと自明性

ギデンズによると、信頼と存在論的安心、物事や人間の連続性という感覚は、大人のパーソナリティの中でも引き続き緊密に結びついていくという。⁽⁶⁰⁾ そこでは、自身と他者、外界の恒常性が主体に想定されている。それは、存在論的安心という精神面での安定性だけによるのではなく、ルーティーンによっても維持されていると、ギデンズは考える。存在論的安心とルーティーンは、習慣を介して本質的に結びついているという。⁽⁶¹⁾ そして、そのような習慣の形成は幼少期にまで遡るとされる。幼児の介護者は、幼児にとっては極度の欲求不満にもご褒美にも関わるルーティーンを、幼児が守れるようになることに重点を置く。⁽⁶²⁾ 一方、ラカン派の観点において、主体の社会化の過程で主要な役割を果たすのは「象徴的なもの」である。主体が象徴的秩序に参入するには、子供が欲求不満を経験しない母子一体の状況からの分離が必要となる。

この点について、ラカンはウィニコットに言及しつつ指摘している。母子の理想的関係においては全てがうまくいっているため、幻覚的満足の次元にあるものと、子供を実際に満足させる現実的对象との区別が成立していない。⁽⁶³⁾ この状態からの距離が次第に生じることで、主体の自立の過程が進行する。すなわち、フラストレーション

に耐えること、その結果として現実と幻影が異なることを、母は教えなければならない。⁽⁶⁴⁾ それにより、満たされないという耐え難い状況に象徴的かつ想像的に適応することが可能となり、欲望する存在としての主体が成立する。こうして母子一体の状況からの分離が生じることを、「去勢」と呼ぶ。ここで、母の乳房は移行対象として機能している。その意味で、それは去勢を予示する離乳の役割を果たすものであると、ラカンが述べる。⁽⁶⁵⁾ このようにして、満たされた状況から隔たった存在として、主体は自身を認識するようになる。ただし、その認識は、象徴化を遂げることによって成立したものにほかならない。何かがあることを示すということは、それが現前する可能性を想定しているということであり、この想定は象徴的秩序を導入することで可能となる。⁽⁶⁶⁾

専門家知識に立脚した抽象的システムに対する主体の信頼も、日常の安定性に基づいて成立していると、ギデンズは考える。信頼は、日々の活動の連続性の中に決まりきった形で組み込まれているのであり、他の選択肢の大部分が排除されている状況を暗黙裡に受け入れるのであるという。⁽⁶⁷⁾ つまり、ギデンズの考えでは、ルーティーンが支配的な状況で、主体は自明性を獲得し維持できるということである。このことは、「伝統」という概念の定義においても言及されている。伝統とは、それ自体がルーティーンであり、過去、現在、未来という時間の連続性の中で信頼感を維持するという。⁽⁶⁸⁾ ギデンズのここでの議論は、脱埋め込みを遂げていない近代以前の伝統に関するものである。近代においては、再帰的に組織化された知識が宗教的世界観に取って代わっていくのであり、伝統は再帰性とは正反対の立場にあるとされる。⁽⁶⁹⁾ しかし、上記のように、近代以降の社会においても、ルーティーンが信頼の構成と維持に不可欠なものであると、ギデンズは考えている。

問題は、ルーティーンと自明性の関係である。ルーティーンそのものが存在論的安心を支えているのではなく、むしろ存在論的安心の結果としてルーティーンがあるのではないかと、櫻村愛子は論じる。⁽⁷⁰⁾ 再帰化が進行し、秩序や人間関係がより不安定化しているとされる現代社会において、ある程度ルーティーンを失っている人々も少なくない。しかし、不安定な社会状況においても存在論的安心が完全に解体することはなく、日常の自明性が維持されているとすれば、自明性はルーティーンと常に連動して維持されたり崩壊したりするものであるとは言えないことになる。⁽⁷¹⁾ 自明性が揺らぐのは、主体の「想像的なもの」の安定性が失われている状態においてである。この安定性は、主体が自身の依拠するローカリティあるいは伝統との関係の中で、現実

の恒常性の想定が可能であることにおいて実現する。そこで作用しているのは「象徴的なもの」であり、それによって主体はルーティーンを構成する伝統と自身との関係を構築することが可能になっている。すなわち、象徴的秩序とは、伝統という社会事実と、想像という精神機能による心理事実とを結びつける仲介者である。⁽⁷²⁾このような仲介者の機能と主体の再帰性の問題との関連性について、次に問うことにしたい。

3. 二つの再帰性

先程引用したラカンによる定義にあるように、象徴化を経た主体が対象の不在を示すということは、その現前可能性を想定しているということである。この状態における欲望のあり方は再帰的であると、ジジェク (Žižek, Slavoj) は論じる。つまり、欲望を満たすことの不可能性が、欲望が満たされないままに維持され続けることへの欲望へと転回を遂げるということである。⁽⁷³⁾ 現前可能性の想定が維持されているならば、それとは異なるパースペクティブに開かれる可能性が遮断されているため、主体の自明性も揺らぎにくいものとなる。既に見たように、ギデンズの考察では、主体の安定性の維持が存在論的安心と信頼をキーワードに論じられていた。「リスク社会」と呼ばれる今日の状況では、専門家システムへの信頼が揺らぐ可能性がある、ギデンズは指摘する。リスクに対する認識が広く浸透していった結果、専門家知識の限界に人々が気づく可能性があるという。⁽⁷⁴⁾ 一方、人々が諸々のリスクを認知するようになったからといって、直ちに極度なまでに不安定化するとは考えられていない。運命という、物事は定められた経路しか辿らないという感情、自身の統制の及ばない遠方の出来事に対する漠然とした認識は、人々を絶え間ない不安から解放する効果を持っているとされる。⁽⁷⁵⁾

このようにして、存在論的安心がある程度不安定化することはあっても、決定的なまでに揺らぐことはないと思なされている。問題は、ギデンズが存在論的安心について論じる時、それが主体の再帰性とのように関係しているのかということについては、十分に論じられていないということである。⁽⁷⁶⁾ その結果、存在論的安心が脅かされる状況が頻出しているという指摘の一方で、そこで主体の再帰性がどのような状態にあるのかということについて、ギデンズの議論は曖昧なままになっている。一方ジジェクは、リスク社会の出現と主体の不安定化の関係を、象徴的秩序に対する信頼の揺らぎという観点から論じている。今日の状況は、あらゆる事象に再帰的性格が浸透した結果の産物であり、信頼は象徴的制度の非再帰的な受容を土台にしている。⁽⁷⁷⁾ た

だし、このように述べるとしても、主体の自明性を単に回復すればよいということにはならない。通俗化された心理学的言説が、人々の物語の再構成によって再帰化の徹底化に停止をかけていることを既に見たが、そこから根本的な問題解決の方向性が見えるわけではない。ジジエックは、精神分析的主体におけるもう一つの再帰性にこそ注目すべきであると述べる。それは、ポストモダンの主体が戯れる、自身のアイデンティティを自由に選択し自在に作り変えていくゲームを完全に御破算にしてしまう再帰性であるという。⁽⁷⁸⁾

対象に到達できないままの状態にある主体は、象徴的な操作を通じて対象を「不在」のものとして位置づけ、それが再び現前する可能性を維持している。このような対象は、欲望の「原因」であると言えるのであり、ラカンはそれを「対象 a」と呼ぶ。⁽⁷⁹⁾ 対象に到達できず、欲望が満たされないままであるということは、「現前と不在」という対立項によっては処理できない事柄、すなわち象徴化の行き詰まりとしての「現実界」あるいは「現実的なもの」への直面を主体は回避できるということである。主体は象徴化を通じて、対象の「欠如」を「不在」に置き換えることに成功する。換言すれば、対象 a は、去勢において現れる中心的欠損を象徴化する。⁽⁸⁰⁾ それによって、対象を追い求め続ける主体のパースペクティブは自明性を獲得し、欲望の維持を欲望する状態が不断に再生産されていく。しかし、主体が自身の認識の座標軸そのものを問い直すならば、この状況は変化し得る。それに成功した時、主体は自身の構造的欠如に気づくだろう。この欠如とは対象 a が塞ぎにやってくる点であり、この点にこそ主体は自身をそれとして認めなければならない。⁽⁸¹⁾ このようなパースペクティブの根本的な変革こそが、自己批判的な再帰性である。

ギデンズは、リスク社会の問題が山積する状況を打破する可能性として、「ユートピア的現実主義」を提唱する。それは、代わるべき未来を心に想い描き、その未来像の喧伝を通して実現を促進していくことであるという。⁽⁸²⁾ 未来に対する構想力には、自我の想像的な機能が関与している。この機能は、主体が去勢を経ることによって作動するようになる。すなわち、対象を剥奪されて初めて、それがいつの日か自分にも与えられるということを知る。⁽⁸³⁾ 対象の剥奪者は想像的に指定された他者であるが、この他者との関係において、欲望の維持を欲望する主体の未来への構想力も機能する。ところが、先程述べたように、欲望の再帰性が安定性を発揮していた状況が、今日の社会では失われつつあるという問題がある。ギデンズは、リスク社会における人々の不安定化や存在論的安心について論じる一方で、主体の安定性の維持や喪失に関する

構造的な考察が十分ではない。そのため、ユートピア的現実主義が有効であり得る条件については曖昧なままとなっている。しかも、ユートピア的現実主義が示す未来への構想においては、欲望の再帰性によって主体の現時点でのパースペクティブが温存されたままとなる。それゆえ、その座標軸自体が変容するという自己批判的な再帰性の契機が失われているのではないだろうか。

おわりに

これまで見てきたように、再帰性が徹底化していることが今日の社会の一つの特徴であると、ギデンズは考えている。そこでは、主体と社会の同時変容が生じ、「他者」はもはや存在しないと、既に引用した箇所でもギデンズは述べていた。それに対してロバートソンは、「個別主義の普遍主義化」と「普遍主義の個別主義化」を指摘し、グローバル化とローカル化が同時進行していること、それゆえグローバル化の統合の中で「他者」は常に存在し続けることを指摘した。しかし、繰り返しになるが、これは概念の定義と力点の置き方の違いである。ギデンズは、グローバル化による世界規模での相互依存状態が生じていることを強調し、そのような状態の外部としての「他者」なるものは存在しないと述べている。ギデンズは差異の抹消が生じると考えているのではなく、そのような差異化そのものがグローバル化という枠組みに規定されていると認識しているのである。問題は、この両者の認識は共に、同質性と差異性に関する想像的な自他関係にとどまっているという点である。つまり、両者が定義する「他者」とは、欲望の再帰性の内部でのみ機能する固定されたパースペクティブの産物なのではないかということである。

主体から対象を剥奪したと想定される他者を、ラカンは「想像的父」と呼ぶ。そこにあるのは理想化の弁証法であり、この父は想像的、鏡像的關係の一部である。⁽⁸⁴⁾ 想像的であるがゆえに、他者との関係は象徴的な統御の揺らぎに伴って容易に不安定化してしまう。ただし、その状態においてパースペクティブの変容が経験されているわけではなく、鏡像関係に基づく自他の関係は維持されている。去勢の経験がなされるのは、実際にいるものとしての父、現実的父が、その想像的機能を果たす限りにおいてであると、ラカンは述べる。⁽⁸⁵⁾ つまり、対象の剥奪者として想像的に措定された父は、実際には主体と同様に構造的欠如を抱えた存在である。その欠如ゆえに、他者もまた欲望するのであり、主体が求めていたはずの対象の所有者などではない。この認識において、主体はそれまで有してきたパースペクティブの限定性、すなわち自身の象徴

的秩序の欠如としての「現実的なもの」に直面する。ギデنزとロバートソンが定義する「他者」には、このような現実的他者との遭遇の契機がないため、自己批判的な再帰性へと至ることがないのではないだろうか。再帰性に関する考察は、それが機能する条件を示す精神分析の観点との関連で展開されることによってこそ、その新たな可能性に開かれるはずである。

注

- (1) Giddens, p.1. (邦訳 p.13)
- (2) Lyotard, p.34. (邦訳 p.41)
- (3) Giddens, pp.2-3. (邦訳 p.15)
- (4) *Ibid.*, p.3. (邦訳同上)
- (5) *Ibid.*, p.17. (邦訳 p.31)
- (6) *Ibid.*, p.18. (邦訳 pp.32-33)
- (7) 村上 (2001)、p.115.
- (8) Giddens, p.20. (邦訳 p. 34)
- (9) *Ibid.*, p.21. (邦訳 pp.35-36)
- (10) *Ibid.*, p.29. (邦訳 p.44)
- (11) *Ibid.*, pp.35-36. (邦訳 p.52)
- (12) *Ibid.*, p.37. (邦訳 p.54)
- (13) *Ibid.*, pp.37-38. (邦訳 pp.54-55)
- (14) *Ibid.*, p.38. (邦訳 p.55)
- (15) *Ibid.* (邦訳同上)
- (16) 宮永、p.21.
- (17) Giddens, p.51. (邦訳 p.70)
- (18) 村上 (1994)、p.91.
- (19) 同上、p.235.
- (20) 宮永、p.20.
- (21) Giddens, p.64. (邦訳 p.85)
- (22) *Ibid.* (邦訳 pp.85-86)
- (23) *Ibid.*, pp.79-80. (邦訳 p.102)
- (24) *Ibid.*, p.84. (邦訳 p.107)
- (25) *Ibid.*, p.80. (邦訳 p.102)

- (26) *Ibid.*, p.88. (邦訳 p.112)
- (27) *Ibid.*, p.89. (邦訳 p.113)
- (28) 村上 (1998)、p.104.
- (29) 櫻村、pp.233-234.
- (30) Giddens, p.144. (邦訳 p.179)
- (31) *Ibid.* (邦訳 pp.179-180)
- (32) *Ibid.*, p.175. (邦訳 p.216)
- (33) Robertson (邦訳 p.13) 邦訳は部分訳であり、その冒頭には原著にはない「序章 日本の読者へ」という項目がある。邦訳のページ数のみを記すものに関しては、この箇所からの引用である。
- (34) *Ibid.*, p.143.
- (35) 宮永、p.43.
- (36) 同上
- (37) Robertson (邦訳 p.5)
- (38) *Ibid.* (邦訳 pp.13-14)
- (39) *Ibid.* (邦訳 p.14)
- (40) *Ibid.*, p.102. (邦訳 p.136)
- (41) *Ibid.* (邦訳同上)
- (42) Giddens, p.177. (邦訳 p. 219)
- (43) *Ibid.*, p.175. (邦訳 p. 216)
- (44) Robertson, pp.144-145.
- (45) *Ibid.*, p.145.
- (46) Giddens, p.177. (邦訳 p. 219)
- (47) *Ibid.*, p.92. (邦訳 pp.116-117)
- (48) *Ibid.*, p.94. (邦訳 p.119)
- (49) Erikson, p.10. (邦訳 pp.21-22)
- (50) *Ibid.* (邦訳 p.22)
- (51) Winnicott, pp.9-10. (邦訳 p.13)
- (52) Giddens, p.97. (邦訳 p.122)
- (53) *Ibid.* (邦訳 pp.122-123)
- (54) Winnicott, p.11. (邦訳 p.14)
- (55) Giddens, p.96. (邦訳 p.123)
- (56) *Ibid.* (邦訳同上)
- (57) Lacan(1975), p.169. (邦訳 p.238)
- (58) *Ibid.*, p.161. (邦訳 p.226)
- (59) 齋藤、p.86.
- (60) Giddens, p.97. (邦訳 p.124)
- (61) *Ibid.*, p.98. (邦訳同上)
- (62) *Ibid.*, p.98. (邦訳同上)
- (63) Lacan(1994), pp.34-35. (邦訳 [上] p.36)

- (64) *Ibid.* (邦訳同上)
- (65) Lacan(1966), pp.847-848. (邦訳 p.374)
- (66) Lacan(1994), p.218. (邦訳 [下] p.30)
- (67) Giddens, p.90. (邦訳 p.115)
- (68) *Ibid.*, p.105. (邦訳 pp.132-133)
- (69) *Ibid.*, p.109. (邦訳 p.136)
- (70) 樫村、pp.144-145.
- (71) 同上、p.145.
- (72) 佐々木、p.21.
- (73) Žižek, p.345. (邦訳 p.210)
- (74) Giddens, p.130. (邦訳 p.162)
- (75) *Ibid.*, p.133. (邦訳 p.165)
- (76) 樫村、p.66.
- (77) Žižek, p.342. (邦訳 p.205)
- (78) *Ibid.*, p.345. (邦訳 p.210)
- (79) Lacan(1973), p.270. (邦訳 p.329)
- (80) *Ibid.*, p.89. (邦訳 p.101)
- (81) *Ibid.*, pp.300-301. (邦訳 p.364)
- (82) Giddens, p.154. (邦訳 p.192)
- (83) Lacan(1994), p.209. (邦訳 [下] p.16)
- (84) *Ibid.*, p.220. (邦訳 [下] p.31)
- (85) *Ibid.*, pp.364-365. (邦訳 [下] p.222)

参考文献

- 樫村愛子『ネオリベリズムの精神分析 なぜ伝統や文化が求められるのか』光文社新書、2007年。
- 斎藤環「なぜ『精神分析』か?」、『大航海』第51号、2004年。
- 佐々木孝次「森田療法と精神分析——心理療法におけることばの意味——」、『I. R. S. —— ジャック・ラカン研究 ——』第4号、2005年。
- 宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社、2000年。
- 村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社、1994年。
- _____『安全学』青土社、1998年。
- _____『文化としての科学/技術』岩波書店、2001年。
- Erikson, Erik H. *Identity and the Life Cycle*, W. W. Norton & Company, 1980. (小此木啓吾訳『自我同一性 アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房、1973年。)
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*, Polity, 1990. (松尾精文、小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? —— モダニティの帰結 ——』而立書房、1993年。)

- Lacan, Jacques. *Écrits*, Seuil, 1966. (宮本忠雄他訳『エクリ [Ⅲ]』弘文堂、1981年。)
- _____. *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Seuil, 1973. (小出浩之他訳『精神分析の四基本概念』岩波書店、2000年。)
- _____. *Les écrits techniques de Freud*, Seuil, 1975. (小出浩之他訳『フロイトの技法論[上]』岩波書店、1991年。)
- _____. *La relation d'objet*, Seuil, 1994. (小出浩之他訳『対象関係 [上・下]』岩波書店、2006年。)
- Lyotard, Jean-François. *Le Postmoderne Expliqué aux Enfants*, Galilée, 1988. (管啓次郎訳『こどもたちに語るポストモダン』ちくま学芸文庫、1998年。)
- Robertson, Roland. *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage, 1992. (阿部美哉訳『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』東京大学出版会、1997年。)
- Winnicott, D. W. *Playing and Reality*, Tavistock, 1971. (橋本雅雄訳『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社、1979年。)
- Žižek, Slavoj. *The Ticklish Subject: The Absent Centre of Political Ontology*, Verso, 1999. (鈴木俊弘、増田久美子訳『厄介なる主体 政治的存在論の空虚な中心 [2]』青土社、2007年。)

On Reflexivity defined by Anthony Giddens

<Summary>

Yuki Hagiwara

Reflexivity is a keyword of contemporary global society. This concept is used in many areas, and the most famous definition may be by Anthony Giddens from the view of sociology. One of his books where he intensively refers to reflexivity is *The Consequences of Modernity*. The purpose of this paper is to reexamine Giddens's definition by reading this book critically.

According to Giddens, modernity appeared in the 17th century, and it now can be seen all over the world as a result of globalization. He criticizes the concept "postmodernity", which is defined by Jean-François Lyotard as a situation after the end of meta-history. Giddens says that contemporary situation is not the decline of modernity. On the contrary, we are in the phase of its radicalization. The gradual decline in European hegemony is a result of globalization which has been brought about by universalization of modern European civilization. We can see a paradox of civilization here. The more modernity is radicalized through the process of its universalization, the more its hegemony is threatened. A keyword to understand this paradox is reflexivity.

Reflexivization consists of disembedding and reembedding. The definition of disembedding by Giddens is the "lifting out" of social relations from local contexts. Disembedded tradition is a modernized one, and it connects the local and the global. People find their locality as a threatened tradition in global society. Globalization and localization, or universalism and pluralism are two sides of the same coin. One of the main characteristics of disembedded tradition is that people rely on expert systems, and their trust in the systems is vested in

expert knowledge. A necessary condition for this trust to function is ontological security. Giddens says that most people have the continuity of their self-identity in the constancy of the surrounding social and material environments. Ontological security involves facework commitments in reembedded tradition. Faceless commitments to expert systems are based on facework commitments.

Giddens makes much of routine, because he thinks that it is intimately connected to ontological security. However, they are not necessarily linked to each other. Some are unstable in contemporary thoroughly reflexivized society where its order and human relations are not self-evident; others are not. Lacanian psychoanalysis explains this difference as the relation between “the symbolic” and “the imaginary”. The symbolic is an intermediary between the subject and his/her tradition, and the imaginary is stable when a symbolic order works well. Ontological security is a non-reflexive basis that he/she is headed for the symbolic, but its function fails gradually in thorough reflexivization today. Trust of the reflexivized modern subject in expert systems has been based on his/her non-reflexive trust in the symbolic.

Another important point which we can find from the view of Lacanian psychoanalysis is on Giddens’s “utopian realism”. He exaggerates that we can envisage alternative futures whose very propagation helps them realized. Such a vision is related to a function of the imaginary. He/she identifies himself/herself with the idealized other who must be beyond his/her symbolic order where he/she is under many restrictions. However, this idealization is an illusion which conceals a lack of his/her symbolic order. A vision of utopian realism prevents him/her to find a deadlock of symbolization, and so he/she cannot change his/her perspective self-critically. Reflexivity defined by Giddens needs to be made up with the view of Lacanian psychoanalysis to deepen our understanding about self-critical praxis.

